資料4（栗田委員）

実災害における
災害時要援護者の実態

特定非営利活動法人
レスキューストックヤード

避難所における
地震直後の被災者の声

2007年3月能登半島地震
2007年7月新潟県中越沖地震

- 家の片付けは何もできていない。睡眠薬ももらっているが慣れない場所で夜は寝付けずに落ち着かない。
- 布団はなく寝具は毛布と座布団だけ。
- 片付けをしたいが、余震が怖いし、一人暮らしで足もないので家に行けず何もできない。
- 食事はおにぎりとカップスープだけ。野菜が取れていない。でも暖かい場所がもらえるだけでもありがたいと思わなければ。
- 「おひたしが食べたい」と思っても贅沢いえない。1週間程度の便秘は我慢するしかない。
- 和式トイレしかなく、足がわるいので長い時間しゃがめない。
- 寝床がくっついているために、夜間のトイレに行く際の通路確保が大変。つまづきやすいので、介助が必要だった。出入り口のドアを開けっ放しにして用を足しに行く人もおり、大きな声で苦情を訴える人もいた

- 障害者用トイレの場所がわからずに、大人のオムツを交換する場所がないということで困っていたのに、気兼ねして訴えられなかった。
- 共同生活での不満（いびき・はぎしり・トイレに何回も行くなど）
- 血圧の薬が持ち出せず、血圧が２００を超えてしまった。
- 施設内の洋式トイレに水が出ないため、便器にゴミ袋をかぶせ、用をたした後、凝固剤を振りかけて処理し、袋の口を縛って、ゴミ箱に入れるという手順で環境を整えているところがあった。しかし、処理の方法が複雑なため、高齢者はほとんど理解出来ていない様子。
- だだっ広い体育館ではつかまるところがないため、一人で立ち上がるのも大変な状態。仮設トイレは出入口付近に設置されているが、通路全てに手すりがあるわけではないので、誘導する人員が必要と思われる。

- 居住スペースから、スリッパも無くそのままトイレ室内まで移動している。
- 排泄後は消毒薬はなく、断水も続き、ウェットティッシュで手を拭く程度。
- 和式の仮設トイレだけで対応しているところでは、手すりがなく、段差に足を取られ、トイレ室内で転倒し汚物まみれになって、助けを求めていた高齢者がいた。
- 居住スペースから、仮設トイレの設置場所まで距離があるため、一人での移動が困難な方がいた。
- トイレが間に合わず、失禁する高齢者もおり、周囲への臭いなどを気兼ねしている様子。
- 床に毛布を1枚敷いただけの寝床。高齢者だけでも、畳敷きかマットレスの確保が必要。

災害ボランティア活動で傾聴した被災者の声

2009年8月台風9号（佐用町）

- 天井近くまで水が迫るのを物を積み上げてその上に乗って耐えた。
- 今回で3回目の被災。1回目は25年程。前前回は2004年、そして今回。　今回の被害は一番ひどかった。床上2メートル。90年生きてきて(こんなに)ひどいのは初めて。20時過ぎからまたたく間に水が来て、孫に手をひいてもらわないと歩けなかった（90代女性）
- 前からも後からも水が来て、あっという間に腰までつかったが、平屋のために逃げる場所もなく、そのまま過ごした。（途中泣き出す）一人暮らしのため、兄弟や子供が手伝いに来てくれたが、寝る場所もない（80代女性）
- 一気に水が来たので、避難はできなかった（50代男性）
- 本棚の下半分が水がつかり、本はぐちゃぐちゃになってしまった。4、5分～10分の間に水が来た。5年前くらい前は、15センチくらいだったが、今回は前と全然違う（40代女性）

- 車で帰るときに、雨がたくさん降ってきて、あっという間に車が半分くらいつかった。どこが道路かが分らなくなり、すごく怖かった。道を知っていたので、わかる道で帰ったら、水が引いて、なんとか帰ることができた。（60代女性）
- TVを見ていて、雨が降っているな～と思ったら、5～10分後に急に雨がたくさん家の中に入ってきて、あっという間だった。こんなに水につかったのは初めて。服など1階にあって、すべてダメになった。

災害救援NPOとしての所感

- どれだけ現場の生の声を聴いたか？
  ～鳥の目と虫の眼･被災概要と当事者の声
- 「被害」を見るのではなく、「人」を見ているか？
  ～災害の種類や規模、被災状況はすべて異なる
- 本課題を「地域」へ落とすプロセスが必要
  ～一住民として考える機会の創出を（別紙）
- 避難支援プランがアリバイ作りにならないように
  ～名簿づくりではなく、地域づくり

災害時の避難所間仕切りセットの提案

災害等の際、避難場所に設定される体育館等の大広間をすばやく小区画に間仕切り（小部屋群化し）、避難者及び避難家族のプライバシーを確保、避難生活を快適化することができる、きわめて簡易かつ廉価な間仕切り（小部屋群化）セットを提供。AJU自立の家との共同販売。

※平成 18 年 7 月ぎょうせい発行『高齢者・障害者の災害時の避難支援のポイント』より栗田執筆担当箇所より抜粋し、一部修正した。

□地域に対する災害時要援護者の生の声

災害時要援護者の生の声を聞いたことがあるだろうか。彼らが災害に対してどんな不安を持ち、地域の方々や支援者等に何を援助して欲しいと願い、また行政にどんな整備を求めているか。例えば、現実問題としてバリアフリー化されていない小中学校が避難所指定されていても、車いす生活者等は避難に支障をきたすのは当然といえる。行政が福祉避難所や福祉避難室等の指定を行うことも急務な課題だが、地域においても「ちょっとした配慮」で解決できる問題もあるはずだ。耳を貸さないのか、声が届かないのか。いずれにしても、当事者の意見にしっかり耳を傾け、課題の一つひとつをともに協議し、改善に向けてそれぞれが努力していく必要があるといえる。

■避難方法について	
1	交通弱者といわれる高齢者や障がい者等が避難場所に安心してたどり着ける避難路のアクセスを考えて欲しい。
2	基本的に、どこへ行くにも移動が困難。人の手を借りないと避難できない。
3	私が住んでいるＡ市が用意した防災マップによれば避難先はＢ演習場となっているが、どこに入口があるのか、また避難先としてバリアフリーなのか、不明である。わかり安い防災マップがないと災害時の役に立たない。
4	避難所まで遠すぎて、自力での移動は困難。各自治会あるいは民生委員等でサポート体制を構築しておいて欲しい。
5	てんかん発作がでなければ避難できるが出たときに支援者一人では避難が困難。
6	車イス用トイレを障がい者専用で作ってもらえる体制がほしい。時間を決めて、排泄しているため、避難をする必要があると団体生活になるので行きたくなったとき、自由にできなくなる場合もある。
7	重度障がい者が避難できるような避難所はそもそもなかった。また、中越地震の際は親と一緒だったし、避難するまでいかなかったのでそれほど困らなかったのですが、もし１人だったらと考えると今でも本当にぞっとします。ですから災害時に１人で逃げることが困難な人のところには、必ず誰かが駆けつけて避難・誘導の手伝いをするという仕組み、特に重度障がい者のところにはしっかりと介助ができる人が駆けつけられるというような仕組みを作る必要があると思います。
8	療護施設利用者にとって、施設が被災したらどうするのか？どうやっていくのか？をあらかじめ知らせておいてほしいと思う。
■避難情報について	
9	災害時の情報は自動車のマイクで知らせても聞こえないので、聞こえない人には FAX 等文字で知らせるシステムを平常より作っておくこと。
10	障がい者の夫婦なので、家の外に出ることも困難になった場合、避難勧告が屋外で伝えられても、なかなか家の中にいる者まで伝わってこない。地域で障がい者のすんでいる家を把握しておいて、災害時には特に注意して災害についての情報が伝わるようなシステムを作っておいた方がいいのではないか。
11	掲示板に行かないともらえないのは、足の不自由なものには問題と思います。

	避難所の環境にもよるが、情報は必ず紙にして渡してほしいです。そして、短い言葉で書き記してほしいです。長文でしかも小さい文字はやめてほしい。
12	自治会に入っているので、避難場所の一枚ものプリントや連絡先のわかりやすいものがほしい。
13	中越地震の際、緊急避難的に重度障がい者を受け入れてくれる施設などの情報が、震災後しばらくしないと出てこなかったし、その施設への緊急避難の交渉も、すべて本人に任されていた。やはり災害が起きる前から行政は緊急避難できる施設などをリストアップしておき、何か起きた際には、スムーズに避難できるように調整をしてほしいと思う。
14	失語症のためきちんとした情報が伝わりにくい。避難所の掲示板もたくさんの情報がありすぎて、自分に必要な情報を選択できず、不安や混乱が生じたようだ。家族が会員に要約していたが「見出し」のように整理して大きい文字でわかりやすい掲示が必要。
15	一人暮らしの障がい者が孤立しないよう、各自のルートや、ここに障がい者がすんでいることを他人に知っておいてもらうのもひとつだと思う。普段から障がい者が良く使う福祉施設などを避難場所にしてほしい。（一般の方は学校などに避難するように進めている地域もあるようです）
16	支援する人がなれていないと、コミュニケーションが難しく、情報を伝えることが困難、移動を促すことが難しい。
■避難所について	
17	近隣に小学校がある。トイレ洗面が可能な場があるか？トランスが大変なので、簡易ベッドが欲しい。構内の移動は可能か、心配。
18	頚椎損傷なので、布団で寝るとき、乗り降りや床ずれになるのが心配。トイレにも時間がかかるので、プライバシーが守られる個室の洋式トイレで車イスでもいけるトイレを１ヶ所以上確保して欲しい。
19	自己導尿をしていますので、清潔な、使いやすい、お手洗いがあるかどうか心配です。
20	バリアフリー化はもちろんだが、障がい者の介護に慣れたボランティアを避難所に派遣できるような体制を作っておいてほしい。
21	配給などを自分でなかなか取りにいくことができなかった。避難所にサポートできるシステムを導入するべき。
22	自閉症者は、結局避難所でまわりの人と同一行動ができず、親が肩身の狭い思いをし、避難所に入れなかったのです。パンひとつ貰うのにも一人で並べない人がいることを考えてほしいです。

特定非営利活動法人ゆめ風基金（※）が「障がい者市民防災提言集」発行のために実施したアンケートより抜粋

※特定非営利活動法人ゆめ風十億円基金（代表理事：牧口一二）
阪神･淡路大震災で家や作業所を失った障がい者たちを長期に亘り支援すること。また各地の災害時にその地域の障がい者たちに基金を活用してもらうこと。この二つの目的のため、10 年間で 10 億円の基金を作ることを目標として 1995 年 6 月に活動を始めた NPO。
〒533-0033 大阪市東淀川区東中島 1-14-1　シティハイム 108
TEL:06-6324-7702　FAX:06-6321-5662　E-mail: yumekaze@nifty.com
http://homepage3.nifty.com/yumekaze/